②サキブトミル　緑藻植物ミル科

体は樹枝状に枝分かれしています。円柱状で正しく2叉または3叉に分枝します。高さ10～17㎝、太さ3～5㎜、一見ミルに似ていますが、枝の先はふくれて棍棒状になっています。この浜の「潮だまり」の石に付いている小さいものを見つけ確認しました。

③ワカメ　褐藻植物コンブ目チガイソ科

春に下見に行ったとき、広い砂浜に打ち上げられていたものを確認しました。また、今回の調査でも流れ着いた根に近い部分も見つかりました。恐らく沖合の深いところに生えていたものが千切れて流れ着いたものと思われます。

④ホンダワラ　褐藻植物ホンダワラ科

岩礁地帯の「潮だまり」の深みや岩礁帯の沖合い付近に多数繁茂しています。投網を打つと網一杯にかかって引き上げられました。根は仮盤状で、1本の茎から長い枝をたくさん出しています。茎は四角柱状で、所々に突起があります。茎は高さ（長さ）1ｍ以上、ときには数mにもなります。葉はへら状、楕円形または笹状です。所々に小米粒状の紡錘形の生殖器床があり、つぶすとプチンと音がします。

まとめにかえて

以上、南芦屋浜の生き物調査の現在までに明らかになったここの生物相について述べてきました。この実態調査を踏まえていくつかのことが推定されます。その一つは、この人工海岸が形成されてからほぼ10年の中でかなりの海生生物が棲みつき始めていること。生態学的には、この海岸のいわゆる人工岩礁地帯の磯的環境と、防潮堤外海の外洋とではかなり自然環境がことなり、10月30日の刺し網漁調査の結果も踏まえると、生息する魚種の違いなども明らかになりました。一方、この岩礁磯海岸と防潮堤外海とのつながりもその魚種や幼魚、成魚の成長段階の違いから、人工磯が多くの魚の稚魚、幼魚の比較的安全な生育場所を保証しているらしいこと、それを土台として成長した魚が外界に出て回遊しながら沿岸域の生態系を造り上げているらしいことなどがおぼろげながら見えてきました。その意味では、この人工海岸が芦屋沖の魚相の生産源として一定の役割を果たしているらしいことも分かってきました。

とはいうものの、まだまだ不十分な調査の域は出ておらず、今後も継続して明らかにしていかなければならない課題も多くあります。今回の調査を踏まえてさらなる調査を発展する必要があることを述べ、今回の調査の報告をひとまず締め切りたいと考えます。

南芦屋浜周辺に飛来する野鳥調査

― 南芦屋浜周辺の水鳥を中心とした年間の野鳥について確認 ―

はじめに

海浜という環境は野鳥にとっても重要な生活環境であることはいうまでもありません。そこで第6期芦屋市環境づくり推進会議の主要テーマ「南芦屋浜の人工海岸の自然環境の実態を明らかにする」という取り組みの一環としてこの人工海岸付近に飛来する野鳥の調査もとり組んできました。人工海岸は、創設当時より冬期には多くのカモ類、シギ類などを中心に冬鳥といわれる北国からの渡り鳥が多く飛来を始めていましたが、その本格的な調査はまだ公式にはなされていません。そこで今回は委員だけではありますが、現在この浜に飛来する冬鳥を軸に海浜の鳥について調査を致しました。

Ⅰ. 南芦屋浜の冬の野鳥

Ⓐカモの仲間（ガンカモ科）

潮芦屋ビーチでも、最も多く目につくのはカモ類です。海岸近くの岩場の間の水域を泳いでいるものもあれば、沖合の海に浮かんでいるものもあります。

食性とそれに伴う生態　⑦ 草食性のカモ類

多くのカモはこのグループに属しています。このカモの習性は、水に完全に潜らないことです。頭を水中に入れても尾は必ず出しています。頭だけを水中に入れて、水際の草の葉や実（種子）、海藻などを食べます。また、水上に浮いているときは、水中に沈んでいる部分が浅いのが特長です。南芦屋浜で見られるものは、次のカモ類です。

①ヒドリガモ　ガンカモ科

芦屋市内で一番多く見られるカモで、ここ南芦屋浜でも、岩場の間の海域でもっとも普通に見られます。雄は白っぽい灰色で首は赤褐色、額から頭頂にかけて黄白色、胸はぶどう褐色と目立った特徴を持っています。雌は他のカモと同様地味ですが、他のカモより褐

色味が多くあります。くちばしは雄雌とも明るい灰色で先が黒くなっています。鳴き声はピューッと笛を吹くような感じです。普通、10羽ほどの群れで行動しています。

②オナガガモ　ガンカモ科

雄はぴんと伸びた長い尾、こげ茶色の顔、灰色のくちばしを持ち、胸からうなじにかけての白いところはよく目立ちます。雌も長い尾、尻の方になるにしたがって淡色になる体が特徴です。頭部を水中に突っ込んだ逆立ちの形で採餌している姿がしばしば見られます。このところヒドリガモに次いで南芦屋浜でよく見かけ、数羽で群れをつくって遊泳しています。

③ハシビロガモ　ガンカモ科

雄は黒い大きなくちばしがよく目立ち、先が広く広がっているのでこの名があります。雄の頭部は暗緑色ですが、脇腹の栗色が鮮やかです。雌は褐色で、他のカモの雌によく似ていますが、特大のくちばしを持つのですぐ分かります。くちばしを水面に付けながら、ぐちゃぐちゃやり、水を濾すようにして水面の餌を食べます。潮芦屋浜では、時折、ヒドリガモなどに混じって遊泳している姿を見かけます。

④カルガモ　ガンカモ科

冬鳥ではなく、留鳥といって1年中同じところに留まっているカモなので、年間にわたって見られます。最近、芦屋市内でもでも増えているようで、芦屋川、宮川、仲ノ池、芦屋浜などでも普通に見られます。ここ南芦屋浜でも他のカモたちに混じってよく見かけます。見分けるポイントはくちばしで、黒色のくちばしの先が黄色なので、他のカモとは簡単に見分けられます。体全体が褐色で、淡色のうろこ斑が全体にあり、眼の周辺の模様に特徴があります。雄、雌とも外形、色彩ともによく似ていますので、外観による識別は難しいです。

食性とそれに伴う生態　㋑ 魚食性のカモ類

もう一つのグループは、魚を食べるカモで「海ガモ」とも呼ばれています。魚を潜って捕らえるため、潜水が得意で完全に水中に潜ることができます。また、浮いているときの体の部分はかなり深く沈んでいるのが特徴です。南芦屋浜で見られるこのグループのカモは、次の3種が確認されています。

①スズガモ　ガンカモ科

雄は頭部が緑色光沢のある黒色で、胸も黒い、やや中形のカモです。背に白地の細かい波状斑があるので灰色に見え、また、上尾筒と尾は黒く、腹と脇は白いので黒白に見えます。雌は黒褐色で、くちばしの付け根に白斑が目立つので見分けるポイントになります。海底が干潟上になった海に冬鳥として飛来、群れをつくって生活します。芦屋では10年ほど前は、芦屋川河口の芦屋浜沖に多数飛来していましたが、その後姿を消し、数年前からこの南芦屋浜沖の内湾状の所に数100羽の集団で訪れるようになりました。人工浜ができて飛来地を変更したようです。この冬は飛来数が少ないようです。

②キンクロハジロ　ガンカモ科

雄は脇腹が白く、他の部分は黒色でツートンカラーの目立つ小型のカモです。頭は紫の光沢があり、冠羽を持っています。眼は黄色。雌は黒褐色で腹は淡色、冠羽は雄より短いです。潜水性のカモの代表で、盛んに潜って採餌します。南芦屋浜では、スズガモの群れに混じって若干見られますが、数は少ないです。

③ウミアイサ　ガンカモ科

マガモ大で体は細長く、雌雄とも長い冠羽を持ち、泳いでいるときは、まるでザンバラ髪のように見えるのでよく目立ちます。くちばしは雌雄とも先がかぎのように曲がっていて紅赤色です。雌雄で体の色彩がはっきり違っており、雄は頭部が黒緑色で、頸部は白く、胸には黄褐色の縦斑があります。背は黒く、下面は白く脇は灰色でなかなかカラフルです。雌は頭部が赤褐色で、喉、頸の全部、胸は白っぽく、背面は灰白色です。以前は芦屋浜でよく見かけました。最近あまり見られなくなりましたが、2年ほど前から、この南芦屋浜に時折姿を見せるようになりました。

2 その他の水鳥や水辺の鳥

カモの他にカイツブリの仲間、ウの仲間や水辺に棲むシギ類、サギの仲間なども南芦屋浜周辺に現れる水辺を生活の場とする鳥たちです。

①カンムリカイツブリ　カイツブリ科

マガモよりやや小さい程度の白っぽく見える大形のカイツブリです。冬場は背面が灰色、腹面が白色。頭頂部が黒く、冠羽は後部でいくぶん長くなり、このため、冠（かんむり）をかぶったように見えるのでこの名があります。魚食性で頻繁に水に潜り、魚を捕らえて食べます。これも冬鳥で、芦屋では、芦屋浜沖に時折現れますが、南芦屋浜でも昨年一度見かけました。南芦屋浜の環境条件から考えると今後もここに渡来してくる可能性は大です。

②ハジロカイツブリ　カイツブリ科

コガモより小さく、潜水が巧みです。体の割に首が長いのが特徴です。全長31㎝くらいで、冬羽は上面黒褐色、下面は淡色。眼の後方の首側ははっきり白いが、よく似ているミミカイツブリに比べて頭頸部の黒白の対象の鮮やかさはそれほど鮮明ではありません（これがミミカイツブリとの識別点）。くちばしはやや上方に反っています。委員の調査会で1羽だけ確認しました。

③カワウ　ウ科

ウの仲間は、体、首、くちばしとも長く、全身が黒色なのが特徴です。飛んでいる姿は、ビール瓶に羽（翼）を付けたような形で、羽ばたきはかなり激しい感じです。カワウは顔が黄色く、その外側は白色。ウミウに似ていますが、カワウは褐色味を帯びているのに対し、ウミウは緑色味を帯びています。水鳥は防水のため、尾脂線から出す脂を羽根に塗り込めますが、ウの仲間はこれが未発達なので、浮力が小さくなり、魚を獲るのには有利ですが、採餌後ぬれた翼を広げて乾かさなければならない不便さもあります。「鵜飼い」に使うのは、カワウではなくウミウの方です。このところ芦屋市内（岩園町仲ノ池、宮川など）でカワウが増えています。この南芦屋浜にも昨年あたりからよく見るようになりました。冬鳥ではありませんので、どの季節でも見かけることができます。

④ハマシギ　シギ科

いわゆる水鳥ではありませんが、ツギミより小型のシギの仲間で、南芦屋浜の岩場付近や海岸で最も多く見られる鳥です。くちばしはやや長く、ほんの少し下へ曲がっています。首は短く、歩くときも餌をとるときも縮めているので、独特の猫背のような形に見えます。灰色の背、淡褐色の胸の線、くちばしや脚は黒色です。飛ぶときは翼に白条が出、腰や尾の外側は白く見えます。翼の下面は白っぽいのが特徴です。鳴き声はジュリーとかジュールと聞こえます。集団で渡来し、南芦屋浜の磯でも、50～60羽の群れで飛び回っています。

⑤イソシギ　シギ科

初夏の頃に見られるシギで、今回見られたハマシギほぼ同じ位の大きさのシギです。背面はいくぶん緑色を帯びた暗灰褐色、腹面は白色です。眉紋は白く過眼線があります。顔から上胸部にかけて暗褐色の小縦斑があります。下面からの白色部が肩先に食い込んでいるのがイソシギの特徴です。6～7月頃、この南芦浜の岩場でも見かけました。

⑥キアシシギ　シギ科

くちばしが黒っぽくてまっすぐです。脚は橙黄色で短く、飛んだとき尾を越しません。この脚が黄色いことからこの名があります。旅鳥として飛来し、干潟、入り江、海岸の岩場などに見られます。この南芦屋浜にも4～5月頃訪れ岩礁地帯で餌を探している姿を見かけます。鳴き声はピュイピュイーと鳴きます。旅鳥なので渡りの途中、立ち寄るのでしょう。

⑦メダイチドリ　チドリ科

全長19.5㎝ほど。コチドリより大きく、上面は全体に褐色で下面は白っぽく見えます。眉斑は白色で太く、胸に褐色の帯があります。くちばし、脚は黒っぽい感じです。両足を交互に動かして歩き、よく歩き走ります。2011年2月15日、南芦屋浜の砂浜の所を2羽走っているところを確認しました。旅鳥で、普通は春、秋にしか見られないのですが、何かの都合で早く移動し、渡りの途中に立ち寄ったものと思われます。

⑧ユリカモメ　カモメ科

古くには「都鳥（みやこどり）」と呼ばれ、昔から親しまれてきたカモメです。秋、シベリア方面から冬鳥として渡ってきます。渡来したときの成鳥は全体が殆ど白く、背面は青灰色、正面の初列風切羽の半数はキラキラするほど白く、先端部は黒いのでその対照は

鮮やかです。くちばし、脚ともに赤く、眼の後ろに小黒斑があります。春になって繁殖期に帰る頃には夏羽となり、頭が黒くなるので別の種類かと思うほど変身します。南芦屋浜にも多く渡来し、海面を舞っていました。芦屋浜、香櫨園浜、武庫川などにも多数飛来し大集団で群れをつくって生活します。

⑨コアジサシ　カモメ科

5月の市民観察会の時、盛んに海上を飛び回り、ホバリング（羽ばたきながら空中で静止する動作）をしながら魚を見つけると上空から一直線にそこに急降下し水中に飛び込んで魚を捕らえている姿を何度も見かけました。夏鳥として飛来し、海岸で餌をとります。背面は淡青白色で下面は白色です。夏羽では頭が黒く額から目の上少し後ろが白く、くちばしは黄色で先が黒くなっています。キリリと鳴き、南芦屋浜でもよく現れ、埋め立ての頃は浜の突堤付近で多数繁殖していました。

⑩イソヒヨドリ　ヒタキ科

ムクドリ大で、雄は上面及び頭部から胸にかけて暗青色、腹は赤褐色で遠くからでは黒っぽく見えます。雌は全体が暗黒褐色で、下面全体は鱗状の模様をしています。岩などに止まり、よく尾を振ります。全国の海岸の岩場で繁殖します。芦屋ではずっと以前（40年近く前：1970年代）に芦屋川河口付近で雄1羽を目撃したことがありますが、今回久しぶりに雌1羽を外海に面する岩場で見ました。2012年2月には甲子園浜の堤防で雄1羽を見ましたので最近この付近の海岸で少し増えているようです。

⑪セグロセキレイ　セキレイ科

セキレイの仲間も水鳥ではありませんが、水辺の鳥で浜辺や川の畔などを生活の場としています。南芦屋浜の海岸でもセグロセキレイは普通によく見かけます。全長21cmほど。体は細長で、尾が長くスマートに見えます。頭部から背面、胸にかけて黒色で、額から目の上に続いた白色の眉斑がよく目につきます。下面は白色、尾羽は黒色で両側は白色です。深い波状飛行をし、着地時には特にはげしく尾を振ります。さえずりは複雑ですが、地鳴きはジジッ、ジジッと低く濁った声で鳴きます。

⑫ハクセキレイ　セキレイ科

大きさは、セグロセキレイとほぼ同じ大きさです。顔は丸く白色ですが、中央の過眼線は黒くて目立ちます。セグロセキレイによく似ていますが、冬羽では背が灰白色をおび、胸の黒色部も小さくなります。地鳴きはやや澄んだ声でチチッ、チチッと鳴きます。この鳥も南芦屋浜海岸でよく見かけます。

⑬アオサギ　サギ科

この海岸ができてから間もなく訪れるようになったようで、餌になる魚が多い関係かこのアオサギが一番よく目に付きます。日本最大のサギで、背面が青灰色（このためアオサギの名がある）、頭は白く、側頭に黒い帯があります。夏羽では黒い冠羽ができます。

⑭ダイサギ　サギ科

全身が白色の大形のサギで、首が長く、細いのが特徴です。くちばしは、夏羽は黒色、冬は黄色、目先が夏は青緑、冬は黄色に変わります。南芦屋浜にも時折訪れます。

⑮コサギ　サギ科

芦屋川でよく見られる小形のサギで、黒いくちばしと黄色の脚指により他のサギと区別されます。夏羽では後頭から2本の白い冠羽がでます。このサギも時折、この南芦屋浜に現れます。

Ⅱ. 南芦屋浜周辺で見られる陸上の鳥

いままで、海岸などの水域で見られる鳥を中心に述べてきましたが、南芦屋浜近くの陸上で生息している鳥もいくつか見られます。

①スズメ　スズメ目ハタオリドリ科

人里に棲む小鳥の代表としてよく知られている鳥です。全長14～5㎝、体の上面は茶褐色で、背には黒い縦縞があります。喉は黒く、頬にも黒斑があります。翼には2本の白帯が目立ち、短く太いくちばし

を持っています。南芦屋浜の砂浜や岩礁地帯で打ち寄せられた餌を求めてやってきています。

②カワラヒワ　スズメ目アトリ科

スズメ大の緑褐色の体で、翼と尾に黄色の斑があります。くちばしは肉色で太く短く、翼は初列風切羽と次列風切の基部が黄色いので、飛ぶと黄色く大きな斑がよく目立ちます。鳴き声は地鳴きがキリリコロロ、さえずりはキリリコロロ、チチチ、チョンジューインなどです。南芦屋浜の東側クロマツ林などに小群で生息しています。

③メジロ　スズメ目メジロ科

スズメより小さく、黄緑色の鳥で、眼のまわりに白い輪があるのでこの名があります。サクラやツバキの花の蜜を好んで集まります。鳴き声は、地鳴きはチーチーで、さえずりはチーチュルチーチュルチーチーチュルチーなど早口で「長兵衛、忠兵衛、長忠兵衛」と聞きなしされます。南芦屋浜では、浜の松林、総合公園で姿や鳴き声を確認しました。

④ムクドリ　スズメ目ムクドリ科

芦屋市内でも多く見られる鳥ですが、南芦屋浜でも東側の雑草原などに群れています。黒っぽい体で顔の白い模様があります。尾は短く、くちばしと脚の橙色がよく目立ちます。全体は灰黒色ですが、頭、翼、尾は黒っぽく、顔の白色部は個体差があります。腹は白く、飛翔時に白っぽく見えます。鳴き声はリャーリャーとやかましく聞こえます。

⑤ヒヨドリ　スズメ目ヒヨドリ科

芦屋市内でも一番よく目に付く中形の鳥で、ピーヨ、ピーヨという鳴き声からこの名があります。南芦屋浜にも付近にも進出し民家や樹木に止まって盛んに鳴いています。全長27.5㎝。体は灰褐色で、頭と顔は青灰色が強く、茶褐色の耳羽が目立ちます。くちばしは細くて黒いです。

⑥ハシボソガラス　スズメ目カラス科

ハシブトガラスより小さく、くちばしも細いのでこの名があります。市街地にもっとも普通に見られます。ゴミを荒らすので困りもののカラスです。南芦屋浜でも波打ち際に打ち寄せられた餌（魚の死んだものなど）に群がって餌あさりをしています。

Ⅲ. 芦屋市総合公園で見られる冬の鳥

なお、南芦屋浜に近接する芦屋市総合公園内に飛来している冬鳥の仲間についても併せて調査しましたので以下に附記しておきましょう。

①ツグミ　ヒタキ科

晩秋から初冬にかけて集団で大量に渡来する冬鳥で、明るい開けた場所を好み、総合公園の広場などの地上で採餌する姿を見かけます。ムクドリ大でスマートな体つきですが細い体ではなく、静止姿勢は頭を斜め上に向け、胸を張った感じがします。地上ではちょんちょん跳ぶように移動します。上面は黒褐色で、翼には赤褐色の部分があります。下面は汚白色で、胸にははっきりした黒斑が帯状にあります。眉斑は淡色で目立ち、喉は大きく淡色です。雌雄同色。鳴き声は二種類でクエッ、クエッまたはキイーキィーと鳴きます。

②マミジロタヒバリ　セキレイ科

最初はタヒバリと思っていたのですが、少し違うようなので元武庫川女子大教授で鳥類学専攻の白附憲之氏に同定をお願いしたところ本種であることが分かりました。日本でも稀にしか見られない旅鳥で、とても珍しい鳥だそうでした。渡りの途中で立ち寄ったことが考えられます。スズメよりやや大きめの暗褐色の鳥です。背面は緑色がかった暗灰褐色、淡黄褐色の眉斑があり、下面は淡い黄褐色の縦斑があります。ビンズイによく似ていますが、背面の色がビンズイが黄褐色っぽいのに対して緑色味が強いこと、鳴き声が異なることで区別できます。地上性。交互歩行で歩き、飛翔は、早く翼を羽ばたき、波状に飛びます。数羽の小群でいることが多いようです。地鳴きはチィーあるいはツイーとメジロの地鳴きに似た声を出します。

以上、今まで南芦屋浜で確認した水辺の鳥を中心とした鳥の種類です。これをまとめると以下のように15科30種が現在までに確認された鳥です。

①ガンカモ科　カルガモ・ハシビロガモ・オナガガモ・ヒドリガモ・スズガモ・キンクロハジロ・ウミアイサ…7種
②ウ科　カワウ…1種
③カイツブリ科　カンムリカイツブリ・ハジロカイツブリ…2種
④カモメ科　ユリカモメ・コアジサシ…2種
⑤シギ科　ハマシギ・イソシギ・キアシシギ…3種
⑥チドリ科　メダイチドリ…1種
⑦サギ科　アオサギ・ダイサギ・コサギ…3種
⑧セキレイ科　セグロセキレイ・ハクセキレイ・マミジロタヒバリ…3種
⑨ヒタキ科　イソヒヨドリ・ツグミ…2種
⑩メジロ科　メジロ…1種
⑪アトリ科　カワラヒワ…1種
⑫ハタオリドリ科　スズメ…1種
⑬ムクドリ科　ムクドリ…1種
⑭カラス科　ハシボソガラス…1種
⑮ヒヨドリ科　ヒヨドリ…1種

以上が現在までに南芦屋浜とその周辺で確認できた鳥ですが、まだ1年あまりの調査にすぎず、今後の調査でまだまだ種類数は増えるものと思われ、今後に期待が持てます。

まとめ

南芦屋浜に飛来する水鳥や水辺の鳥を調査した結果、次のようなことが考えられます。広い人工湾はスズガモのような大群で飛来する海ガモにとって越冬地としての極めて有効な役割を果たしているといえます。普通のカモ類なども、人の多い芦屋川河口の海岸などに比べ、ゆっくりと採餌でき、一冬越すのに適当な場所として、芦屋の各地域から集まってきている傾向があります。また、旅鳥のように広い範囲を移動する鳥たちには翼を休めるのに適当な休憩場所を提供しているとも言えるでしょう。さらにここに新しい生息場所を見いだした海の生物、特に魚の稚魚や幼魚などがたくさん生息をしだしたこと、磯が形成されたことによって海藻類なども繁茂し始め、これらの鳥の餌も豊富にえられる条件もできました。

これらは元は海だったところに人工の海岸を造成したことによって、広い海域に陸地が出来、その環境に新しい条件が生まれたことで、これらの鳥たちにとっても、今までと違った新しい豊かな環境が形成されたことを意味します。この中でこの南芦屋浜を中心とした新たな生態系が今後発展していくことを見守っていきたいと考えます。

［古市景一］

芦屋市総合公園「ビオトープ」生きもの調べ
― 芦屋の古い住人を残した「ビオトープ」の役割、再確認 ―

芦屋市総合公園事務所より、公園内の「ビオトープ」の水抜きをするので中の生き物を調べてみたらという話がありました。以前、「アリゲーターガー」が捕獲されたという話も聞いていたので、何が放流されているかいささか不安でしたし、また、予想としてもたぶん外来種が多く放されているのではないかと思われていたのですが、あとで見るように、結果は予想とは全く違った内容となり、驚かされた次第です。以下、当日捕らえて種類を確認した「ビオトープ」の生き物についてまとめておきます。

Ⅰ.「ビオトープ」周辺の自然環境について

先ず「ビオトープ」をとりまく自然環境ですが、面積は約250㎡、満水時の水深は約50～60㎝程度、底は軟泥、ヘドロ状で20㎝近くぬめりこむ状態でした。従って水は常時でもうすく濁っている状態で、当日は多くの人が入ったため、泥水状態でした。周辺は水中からアシやコガマが生い茂っており、水中からは熱帯スイレンが数株生え、花を咲かせていました。これらの水中より生える植物の根近くの茎が、この池に棲む生き物の適当な隠れ場所を提供し、魚やエビ類の生存にとって好適な環境をつくりあげていると考えられます。池に採集に入る前、水の減った水面を密集して泳ぎ回る魚などの姿が見られました。

Ⅱ.芦屋市総合公園ビオトープの生き物たち

A 魚類（さかなの仲間）

①モツゴ　　コイ科カマツカ亜科モツゴ属

大きさは、成魚で雄が6～12㎝、雌が5～8㎝と雄が雌に比べやや大形です。口ひげはなく、口は吻端にあって小さく、下あごは上あごよりも突き出した感じです。このため「くちぼそ」の別名があります。繁殖期の雄は、体が黒色になります。3～8月頃